

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370713

研究課題名(和文) 大学入試(個別試験) 英語へのスピーキング・テスト導入にむけた調査研究

研究課題名(英文) Working towards the introduction of English speaking tests into university entrance examinations

研究代表者

羽藤 由美 (HATO, YUMI)

京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授

研究者番号：50264677

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：京都工芸繊維大学の個別入試への英語スピーキングテスト導入を目指して次の(1)～(6)を行った。(1)テストの目的、測定する能力、問題項目、評定尺度、実施/採点手順等を記したテスト細目表策定、(2)CBTテスト実施システム/オンライン採点システム開発、(3)英語のネイティブ採点者とフィリピンのノンネイティブ採点者による採点方式確立、(4)1年次生全員を対象とする大規模パイロットテスト実施、(5)当該テストの学内定期実施化、(6)学部AO入試/大学院特別推薦入試への導入準備。

また、より大規模な入試へのスピーキングテスト導入に向けて、上記実績から得た知見やデータをHPや国内外の学会等で発表した。

研究成果の概要(英文)：Towards the introduction of English speaking tests into the entrance examination process of Kyoto Institute of Technology, we have: (1) drawn up the test specifications (e.g. test purpose, constructs to be measured, test structure, task types and rating scales), (2) developed a computer-based test administration system and an online rating system, (3) established the rating procedure that involves native-speaker raters in Japan and nonnative-speaker raters in the Philippines, (4) administered two large-scale pilot tests to all first-year students, (5) succeeded in having the test administered regularly on campus, (6) begun to prepare to introduce the test into the undergraduate AO entrance examinations and postgraduate recommendation entrance examinations.

For other institutions' benefit on this matter, we have also published the knowledge and objective data obtained through the above-mentioned achievements both at national and international conferences.

研究分野：応用言語学

キーワード：スピーキングテスト 大学入試 教育評価・測定 英語 スピーキング

## 1. 研究開始当初の背景

大学入試への英語スピーキングテスト導入は、半世紀も前からその必要性が広く認識されながら、今日まで実現していない難題である。2006年に大学入試センター試験にリスニングが導入されてからも、2012年10月に本研究への科学研究費助成を申請する時点まで、スピーキングテスト導入に向けた進展はまったく見られなかった。2013年からは、高等学校学習指導要領の改訂により、4技能の統合的育成がさらに重視されるとともに、発信能力の育成を図る「英語表現」や、日常的な会話能力を養う「英語会話」が新設されることになっていた。また、コミュニケーションの機会を増やすために、授業を英語で行うことも求められていた。しかし、新課程の生徒が受験する2016年度入試においても大きな改善は期待できない状況で、センター試験も従来どおりに行われることが、既に発表されていた。そのため、「他大学が動かないなら、我々がやってみよう！」との思いで本研究にとりかかった。

ところが、2013年5月の科研費申請受理と前後して、「教育再生実行会議(第二次安倍内閣)」や「教育再生実行本部(自民党)」等が、大学入試へのTOEFL利用推進を提唱し、その後、文部科学省による英語入試改革は、以下のように進んでいる。2014年11月:文科省内に「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」設置。利用対象となる民間テストを選び、スコアの相関を設定。同年12月:中央教育審議会が、2020年度よりセンター試験に代わる「大学入学希望者学力評価テスト」を実施し、英語は民間テストの活用を検討するとする答申。2015年1月:上記「連絡協議会」の議を経て、同会に参加する民間テスト運営団体が「英語4技能資格・検定試験懇談会」を結成。同年3月:「連絡協議会」が策定した「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する行動指針」を文科省が各大学・高校の長に通知。

その後、大学入試改革について文科省から発表される情報は変転を繰り返し、2020年度にセンター試験に代わって導入され、2024年度からはCBT化される予定であった大学入学希望者学力評価テストについても判然としない部分が多い。しかし英語に関しては、一貫して民間テストの利用が推奨され、大学入学希望者学力評価テストに英語を含めることは明言されていない。

これは、多数の受験者を対象に、入試に求められる公平性や機密性を担保しながらスピーキングテストを実施することが、技術的にもコスト面でも困難だからである。また、韓国が100億円を超える巨費を投じたNEAT(国民英語能力試験)開発が道半ばで頓挫したことの影響も大きい。本研究チームは、このような回りの動きに翻弄されることなく、当初の目的を果たすべく研究を進めてきた。

## 2. 研究の目的

国立大学法人京都工芸繊維大学では、2012年9月に大学入試改革の一環として、一般入試個別試験(英語)へのスピーキングテスト導入を目標とする学際的なプロジェクトチームを立ち上げた。本研究の目的は、このプロジェクトチームが文字通りのゼロから目標達成に至るまでの間に、どのような障害をどう乗り越え、どのような問題が未解決のまま残ったかを明らかにすることにより、センター試験等、大学入試への大規模なスピーキングテスト導入の可能性を探ることである。

日本の英語教育の発展を阻む大きな岩を動かすために、小規模にでもとにかくやってみれば、何がどう困難なのか、実現に向けた課題は何かなどが見えてくるはずである。本研究はこのような信念に基づくものであり、一つの大学に勤務する多様な分野の研究者が、目標達成の過程で行う多領域の調査研究や、直面する各種の軋轢や挫折を克明に記録することを通して、英語スピーキングテストの大学入試導入に向けた問題の在り処を明らかにすることが、その目的であった。

## 3. 研究の方法

以下のように研究を進めた。2013年:1月「KITシンポジウム入試改革を考える-大学入試への英語スピーキングテスト導入の可能性をさぐる」開催。4月英語教員とアドミッションセンターの教員が連携して、スピーキングテストにより何をどう測定するかを検討開始。情報工学系教員の協力を得て、機器開発についても検討開始。2014年:7月株式会社イー・コミュニケーションズ(CBT開発会社)および株式会社KJホールディングス(河合塾)との共同研究契約締結。これを機にCBT(Computer-based test)の開発開始。2015年:1月学部1年次生全員を対象とする第1回(2014年度)テスト実施。入試導入の準備を兼ねて、以後は学内で定期実施することを決定。6月採点および採点者訓練の質の向上に向けて、QQイングリッシュ(フィリピンを拠点とするオンライン英語レッスン提供会社)と、研究契約締結。12月学部1年次生全員を対象とする第2回(2015年度)テスト実施。12月京都工芸繊維大学内に、2018年度学部A0入試、2019年度大学院推薦入学特別入試への英語スピーキングテスト導入に向けたワーキンググループ設置。

## 4. 研究成果

CBT英語スピーキングテストの開発・運営に伴い、以下のような実践を積んだ上で、その経験から得た知見と客観データに基づいて、大学入試へのより大規模なスピーキングテスト導入の可能性と課題について考察した。

### (1) テスト細目表(テストスペック)作成

まず、テストの設計図であるテストスペックを、学部入試に先行して大学院入試に利用することを想定して策定した。本来ならテストスペックは、各専攻のアドミッションポリシーや所属教員へのアンケート調査等に基づ

いて策定すべきであるが、まずは入試へのスピーキングテスト導入のフィージビリティ検証を優先することにして、英語教員の立場から、大学院入試の意義や入学者に求められる能力を検討し、テストスペックを策定した。

#### ①テストの目的

多方面からの検討の結果、テストの一義的な目的は、21世紀のグローバル社会で活躍するために求められる口頭の英語運用能力の習得度を測ることとした。しかし、同等に重視したのは、今後学内で定期実施されるスピーキングテストが学生の学習意欲や態度にもたらす波及効果である。具体的には、このテストを介して学生たちに以下3つのメッセージを送ることも目標に含めた。(a)話すことは日常会話に限定されるものではなく、現代社会では欠くことのできないシリアスなコミュニケーションモードである。(b)学生たちは習得のどの段階においても、ネイティブスピーカーとも対等な国際語としての英語ユーザーであり、コミュニケーションをする際には、ネイティブスピーカーの発音、文法、言い回し、文化的習慣などを規範にする必要はない。自信を持ち、使いうる言語材料を駆使して、伝えるべきことを確実に伝えることが重要である。(c)口頭のインタラクションでは、即時に発話を求められることが多いので、意識的な準備をせずに発話することに慣れておかなければならない。また、前述のとおり、入試へのスピーキングテスト導入に向けた実現可能性の検証も今回テストの重要な目的であった。

#### ②構成概念

構成概念、つまり「このテストで何を測定するか」についても、テストの目的や対象学習者の言語使用領域などに基づいて慎重に検討した。その結果、口頭の英語運用能力と「21世紀型スキル」と言われる想像力、批判的思考力、問題発見・解決力、創造力などを駆使して、与えられたタスク(課題)を達成する能力を主な構成概念と定めた。さらに、コミュニケーションに臨む積極性は外国語習得の鍵であることより、自信を持って積極的にコミュニケーションに取り組む姿勢も、テストの構成概念に加えることにした。

#### ③タスクタイプ

上述の基本理念に基づいて、出題するタスクの種類を決定し、それぞれについて回答を引き出すプロンプト、回答時間、配点等を確定した。なお、テストの目的の一つである発話の即時性を強調するために、全9問中7問には、多くの民間テストで設けられている準備時間をあえて設けなかった。また、実際の場面でもある程度の準備ができると予想される2種類のタスクについては、準備時間を「リハーサル」と呼ぶことで、即時的なインタラクションを想定していないことを暗示した。

#### ④ 評定尺度

採点の基準となる評定尺度は、テストの目的や構成概念に加えて、学生の現在の能力を考慮して作成した。繰り返し行ったパイロット

テストでは、TOEFLを含む民間テストの評定尺度も使ってみた。しかし、CEFRで言えば初級のA2レベルに集中している学生のスピーキング能力を、TOEFLのようにC1、C2の上級者を含む幅広い層の学習者を対象とする評定尺度で識別することは困難であった。そこで今回のテストでは、CEFRのB1レベルを対象とするCambridge Preliminary English Testを参考にして評定尺度を決定した。

評価観点にはTask Achievement, Communicative Language Proficiency, Attitude and Effortの3点とした。これにより、求められるタスクをどう達成するかと、その過程で言語をどう使うかを、分けて評定できることになった。さらに、自信を持って積極的に発話しようとする姿勢や、持てる言語材料をフルに使いこなそうとする努力を評価するためにAttitude and Effortという評価観点も設けた。これらの配慮も、意図する波及効果を生むためのものである。2015年1月実施の第1回テストでは、時間的制約や経験不足もあり、評定尺度については問題を積み残したままの見切り発車となった。しかし、その実績から得たデータは以後の評定尺度改善に大いに役立ち、同年12月実施の第2回テストでは、評価観点をTask achievementとTask deliveryに確定することができた。

#### (2)テスト作成

テストスペックに基づいて、公開用のサンプルテストと、実際に利用する複数のバージョンのテストを作った。たとえば、回答を引き出すプロンプトとして、各テストで用いる会話音声の録音には、京都工繊大のネイティブスピーカーの英語教員に加えて、日本人教員とマレーシアやイタリアからの留学生が参加した。これらも、国際語としての英語運用能力を測定するテストとしての真正性向上を図り、ノンネイティブスピーカーもネイティブスピーカーと対等な英語ユーザーであることを学生に向けて強調するためのものである。

#### (3)アイテムバンク開設

将来の継続的なテスト実施を可能にするために、テストの作成と並行して、アイテムバンクの構築に着手した。このシステムが完成すれば、多数の問題項目に困難度や識別力などのパラメータを付けてプールすることが可能になる。

#### (4)CBT型テスト実施システム開発

CBT方式のテスト実施システムを、京都工繊大の研究チームとイー・コミュニケーションズが共同で開発した。今回開発したのは、PCモニターの映像とヘッドセットからの音声を組み合わせて問題が出され、ヘッドセットに装着したマイクを通して回答が録音されるシステムである。京都工繊大側が、問題提示画面のイメージや動作進行表をPowerPointで作成し、それを基にイー・コミュニケーションズがシステムを設計した。

回答音声データは、一旦各学生のZドライブ上に保存され、複数のサーバーを介して回

収されるようにした。これについては、情報科学センターの教職員が連携し、セキュリティを万全に保ちつつ、漏れなくデータを回収できる方法を検討した。また、万に備えてUSBメモリーにもバックアップを作成した。

テスト実施にタブレットコンピュータを使うことも検討したが、費用、ネットワークの安定性、システムの汎用性などを考慮して、当面は学内に設置された情報演習室のPCを利用することにした。

#### (5) オンライン採点システム開発

採点システムの構築も、京都工繊大とイー・コミュニケーションズが共同で取り組んだ結果、採点者の負担を軽減し、採点ミスを防ぐことのできるユーザビリティの高いシステムを作ることができた。採点者がこのオンラインシステムにID、パスワードでログインすると、問題の映像を視聴できるとともに、各自に割り当てられた回答音声にアクセスできる。採点中は、評定尺度が常に画面上に表示され、特定の評価観点と得点の接点をクリックすると、その得点に該当する回答例を聴くことができる。採点スコアは、同一画面に表示されるプルダウンリストから選んで入力する。入力されたスコアは自動的に集計され、全受験者の項目ごとの得点と合計得点が一枚のスプレッドシートに表示される。同一の項目を採点する複数の採点者のスコアに2点以上の開きが出た場合は、スプレッドシート上にフラグが立ち、シニアレーターがそのスコアを修正できる。

#### (6) 受験学生への周知

望まれる波及効果を生むために、テストの目的や内容を事前に学生に周知することにも力を注いだ。具体的には、年度当初より入学者オリエンテーション、学務課や英語科のウェブサイト等でテストの実施を告知した。さらに、9月末の後期開始直後には、英語の専任教員が必修科目の各クラスを複数回訪問し、テストの概要を記した文書やサンプルテスト等を配布した上で、テストの趣旨や評価観点などを詳しく説明した。また、テスト準備を促すために、スカイプを利用したスピーキングの練習サイトなども紹介した。

#### (7) テスト実施

2014年12月9日には、44名の被験者を対象として、開発直後の受験システムを用いるパイロットテストを行った。その結果に基づいてシステムの一部に修正を加えた後、2015年1月20日～22日の3日間に、第1回テストを実施した。時間は1年次生対象の必修英語科目の授業(50分×2コマ)を利用し、3つの情報演習室において、1日に4グループが受験した。受験者は1年次生551名と、日別に用いた3バージョンのテストを等化するためのアンカー受験者37名であった。また、タブレットコンピュータでテストを実施する可能性を探るために、大学院生8名がMicrosoft Surfaceを使って同じテストを受験した。よ

って、合計596名(延べ670名)が第1回のテストを受験したことになる。

第2回テストは、前年度の経験や実績データに基いて受験システム、テスト運営方法、評定尺度、採点者、採点者訓練などに改善を加えた後、2015年12月20日(土)の休講日に行った。575名の1年次生に、当日用いた2バージョンのテストを等化するためのアンカー受験者69名を加えた合計644名(延べ713名)が受験した。

#### (8) 採点

第1回テストでは、合計9問にそれぞれ45秒間あるいは60秒間で答えることが求められ、一人につき8分15秒の回答音声データが回収された。また、9問×受験者670名で、合計6,030の回答音声ファイルが集まった。これらを採点したのは、京都工繊大の専任教員と非常勤講師を中心とする、英語のネイティブスピーカー7名とノンネイティブスピーカー(母語は日本語)7名である。

6,030の回答のそれぞれをネイティブ採点者とノンネイティブ採点者が併行して、オンラインで採点し、一人の採点者が約100人分の採点を2週間で完了した。また、採点対象の回答を採点者に割り振る際には、事後の等化作業や項目応答理論(IRT)に基づく分析の前提条件を満たすための工夫をした。

採点の前には、採点者が集まり4時間ほどの打ち合わせを行った。その際に、体系的な採点者訓練を行えなかったことは、第1回テストの反省点の一つであった。

第2回テストでは、国際語としての英語運用能力を測定するテストとしての真正性向上を目指し、フィリピンに拠点を置くオンライン英語レッスン提供会社(QQイングリッシュ)と研究契約を結んだ。その結果、ネイティブスピーカーと併行して行われるノンネイティブスピーカーによる採点は、同社セブ校に勤務するフィリピン人英語講師が担当した。

また、第1回テストの採点結果のIRT分析等に基づき、スタンダードセッティングや採点者訓練を、テスト実施の半年以上前から、スカイプやポリコムで日本-フィリピン間を結んで入念に行った。

#### (9) 事前・事後アンケート

受験者に対しては、英語使用に対する意識や態度に関するオンラインのアンケートをテスト前に実施した。スピーキング能力の伸びとの相関を継続的に確認していく予定である。また、テストの後には、問題や出題形式、コンピュータインターフェース等の向上に向けた紙ベースのアンケートを実施した。一方、採点者に対しては、採点終了後に、評定尺度の妥当性やオンライン採点システムのユーザビリティなどに関するアンケートを実施した。

#### (10) 受験者へのフィードバック

受験者にテスト結果を通知するためのフィードバックフォームには、合計得点と評価観点ごとの得点に加えて、受験者全体の中で自

分の位置を示すヒストグラムを表示した。望まれる波及効果を得るためにどのようなフィードバックをすべきかは、今後の研究課題の一つである。

#### (11)改善に向けたデータ分析と考察

受験者や採点者を対象とするアンケートへの回答、パイロットテストおよび二度の定期テストで回収した回答音声データや得点データなど、本プロジェクトを通して膨大かつ貴重なデータが集まった。これらのデータの分析や検証によって、これまでに分かったことの一部を以下に報告する。

##### ①学生対象の受験後アンケートの分析結果

第1回テストの直後に行った受験者対象のアンケート調査では、回答者509名のうち、63.3%が「コンピュータでテストを受けることに違和感はなかった」と答え、第1回、第2回とも70%以上が「スピーキングテストは面接方式でなく、今回のようなコンピュータ方式で構わない」と答えた。これは、真正性の高さからスピーキングテストは面接方式の方が望ましいと言われる中で興味深い発見であった。また、「今後、このようなテストが学内で定期的実施されると、学生全般の英語を話す能力に良い影響を与えると思うか?」という問いには、第1回、第2回とも70%以上が「思う」と答えた。その一方で、「今後、大学院の入試にこのようなテストが導入されるとしたらどう感じるか?」という記述式の問いに対しては、「導入するなら事前に対策できる時間が欲しい」というような建設的な意見に加え、「死ぬ!」「つらい!」「やめて!」「途方に暮れる」「他大学の大学院を受験する」といった短絡で否定的な回答が目立った。これらより、スピーキングテストの有効性を実感しながらも、いざ入試導入となると準備が整っていない学生の実態が明らかになった。

##### ②採点者アンケートの分析結果

第1回テストでは、Task Achievement, Communicative Language Proficiency, Attitude and Effortという3つの評価観点のうち、Task Achievementの評定は、ネイティブ採点者にとってもノンネイティブ採点者にとっても比較的簡単である一方、Attitude and Effortは着眼点がばらつきやすく評定が難しいことが分かった。また、全体を通じた印象や意見を問う質問には、「話す力を評価することの難しさに圧倒された」「忍耐力の限界を感じた」「暗いお経のような回答を長時間も聞き続け、ミゼラブルな気持ちになった」というような回答が目立ち、採点者内信頼性を確保することの難しさに、採点者一同が打ちのめされたことが浮彫になった。「採点はやはり外注が必要」という意見もあったが、外注するにしても、スピーキングテストでは採点の信頼性確保がきわめて難しいことを前提に、テスト結果を用いる必要がある。

##### ③採点データの分析結果

第1回テストでは、問題数9×評価観点3×採点者2×受験者670で、合計36,000回以上の評定が行われた。テスト性能の向上を目指

して、このスコアデータのラッシュモデルによるIRT分析を試みた。その結果、採点データから問題の難易度の影響を排除した形で、受験者のスピーキング能力の違いをうまく表現することができた。また、受験者の英語能力に依存しない問題の難易度指標を得ることもできた。

その一方で、IRT分析の前提として行った因子分析では2因子解が得られ、採点者の属性が英語ネイティブスピーカーかノンネイティブスピーカーかによって因子負荷が異なるという結果が出た。たとえば、Task Achievement, Communicative Language Proficiency, Attitude and Effortという3つの評価観点ごとに行った因子分析では、どの評価観点についても、ネイティブスピーカーの採点結果とノンネイティブスピーカーの採点結果は、異なる因子の負荷が高かった。全9問の項目ごとの因子分析においても、同様の結果が得られた。これはネイティブスピーカーとノンネイティブスピーカーの採点方略が一貫して異なることを示唆するものであり、今後の研究テーマとして興味深い。

さらに、項目別得点と合計得点について、3つの評価観点の相関係数を算出したところ、合計得点については、3つの評価観点間の相関係数はどれも0.80以上のきわめて強い相関を示した。項目別得点についても、27組中24組が0.70以上の強い相関を示し、残りの3組もそれに近い値が得られた。これらの結果だけに基けば、評価観点を統合することによって採点者にかかる負荷を軽減することが合理的に可能と思われた。しかし一方では、評価観点を減らすとテストの妥当性が担保できなくなる恐れがあるため、回答音声データの分析などを含めて、きわめて慎重に検討した結果、第2回テスト以降は評価観点を“Task Achievement”“Task Delivery”の2点とすることにした。

##### ④今後の課題

本プロジェクトの最終目的は学部入試への英語スピーキングテスト導入であるが、この3年間の試みを通して、目標に向けた課題が明らかになった。たとえば、第1回テストの受験者を対象とするアンケート調査では、回答した509名の65.8%が「他の受験者の回答音声にまったく影響を受けなかった」と答えた。その一方で、「影響を受けた」と答えた学生からは、「回りの受験者の声に集中を妨害された」「他の受験者の回答からヒントを得た」といったコメントが寄せられた。また、第2回テストでは、回答者の17.9%が「自分の回答が他の受験者の回答の影響を受けた」と答えた。これは、TOEFLやTOEIC SWなどについてもしばしば指摘される問題であるが、入試導入に向けては、万全の公平性を担保するために、受験環境整備や機器改善が必要である。

採点についての課題も明確になった。まず、採点者の負担を軽減することが必要である。そのために、第1回テストでは一人の採点者が全9問を採点したが、第2回テストでは一人が1問に集中して採点した。さらに、第2

回テストからは、日本人の採点者に代わって、フィリピン人のノンネイティブ採点者が、ネイティブ採点者と併行して採点を行った。この採点方式が軌道に乗れば、採点のコストを大幅に軽減できるとともに、国際語としての英語運用能力を測定するというテストの理念を、問題だけでなく採点にも強く反映することができる。IRT 分析により、今回開発したテストは識別力においても信頼性においても問題の無い性能の高いテストという結果が出た。しかし、今後もテスト性能の維持向上に努める必要があるのは言うまでもない。

さらに、今回、CBT 方式の英語スピーキングテストを独自に開発・実施したことによって、民間テストの大学入試活用に関する問題点もはっきりと見えてきた。本研究によるこれらの成果や今後の課題は、この3年間で、下記のものを含めて合計16件の論文・学会発表・セミナーなどで発表した。また、その上に積み上げる形で、2016年度科研費基盤研究(B)を申請した「入学試験や定期考査に利用できる英語スピーキングテストシステム構築のための指針策定」が受理され、既に研究を開始している。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

・羽藤由美, 神澤克徳

「CBT英語スピーキングテストの開発と実施: 入試への導入にむけた試みの検証」京都工芸繊維大学情報科学センター広報, 査読無, 34号, 2015, 30-48

・山本以和子

「韓国: 国家英語能力試験の挫折」IDE現代の高等教育, 査読有, 569号, 2015, 68-71

[学会発表] (計9件)

・坪田康, 神澤克徳, 羽藤由美

「入試導入に向けたCBT型英語スピーキングテストシステムの開発・運用: 既存の情報演習室を利用する試み」第13回国立大学法人情報系センター協議会, 2016. 6. 24, 京都工芸繊維大学(京都市)

・Yumi HATO, Katsunori KANZAWA, Haruhiko MITSUNAGA, Yasushi Tsubota, Nic Underhill

“Developing a CBT Speaking Test of English as a Lingua Franca” The 50<sup>th</sup> IATEFL Conference, 2016. 4. 16, バーミンガム(英国)

・Yasushi Tsubota, Yumiko Kudo

“Collaborative Activities with English teachers in the Philippines” Philippine-Japan International Roundtable Conference on TESOL in Asia, 2015. 11. 8, セブ(フィリピン)

・羽藤由美

「大学入試への英語スピーキングテスト導入プロジェクト: Computer-based Test の開発・実施・検証」大学英語教育学会英語教育セミナー, 2015. 11. 28, 神戸学院大学(神戸市)

・羽藤由美, 竹井智子, ヒーリサンドラ, 神澤克徳, 伊藤薫

「大学入試への英語スピーキングテスト導入プロジェクト: CBT 方式によるパイロットテストの検証」大学英語教育学会第54回国際大会, 2015. 8. 29, 鹿児島大学(鹿児島市)

・Sandra HEALY, Yumi HATO, Tomoko TAKEI, Katsunori KANZAWA

“Increasing Motivation through a Highly Demanding English Program” The 12th International Asia TEFL Conference, 2014. 8. 29, クチン(インドネシア)

・Yumi HATO, Sandra HEALY, Chieko HAYASHI, Tomoko TAKEI

“Fostering User Identity in Learners of English as an International Language in the Expanding Circle” 2014 AILA World Congress, 2014. 8. 14, ブリスベン(オーストラリア)

・Sandra HEALY, Katsunori KANZAWA, Yumi HATO

“What is the ideal English speaking test for university entrance Examination in Japan?” The 11th International Asia TEFL Conference, 2013. 10. 27, ケソン(フィリピン)

・羽藤由美, 林千恵子, 竹井智子, ヒーリサンドラ, 神澤克徳

「大学入試への英語スピーキングテスト導入の可能性をさぐる」大学英語教育学会第52回国際大会 2013. 9. 1, 京都大学(京都)

[ホームページ]

「京都工芸繊維大学: 大学入試への英語スピーキングテスト導入プロジェクト」

<https://kitspeakee.wordpress.com>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

羽藤 由美 (HATO, Yumi)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授  
研究者番号: 50264677

### (2) 研究分担者

林 千恵子 (HAYASHI, Chieko)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授  
研究者番号: 10305691

坪田 康 (TSUBOTA, Yasushi)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・准教授  
研究者番号: 50362421

竹井 智子 (TAKEI, Tomoko)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・准教授  
研究者番号: 50340899

ヒーリ サンドラ (Healy, Sandra)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・准教授  
研究者番号: 10460669

神澤 克徳 (KANZAWA, Katsunori)

京都工芸繊維大学・大学戦略推進機構・特任助教  
研究者番号: 00747024

内村 浩 (UCHIMURA, Hiroshi)

京都工芸繊維大学・アドミッションセンター・教授  
研究者番号: 90379074

山本 以和子 (YAMAMOTO, Iwako)

京都工芸繊維大学・アドミッションセンター・准教授  
研究者番号: 90293521

### (3) 連携研究者

森迫 清貴 (MORISAKO, Kiyotaka)

京都工芸繊維大学・大学法人本部・副学長  
研究者番号: 90127168

### (4) 研究協力者

ニック アンダーヒル (UNDERHILL, Nic)

英語教育・評価コンサルタント(元 University of Cambridge ESOL Examinations ディレクター)